奇談環雙紙

義

於
184
2

~13
184
2

於 13
184
2
東京學校圖書

奇談環草紙第二巻

欣求浄土乃事

抑も五條あたりまくら女顔のやさしく尋しむかしにありし縁
どもゆかりたる人にまぎれずして佐野ぐ足音覚束に様智の念
ゆ良太とかし人の今は此五條辺にて化粧の具をあきなふ
其世を渡るよし其の住ところをたづねしめさば押しくく
来べとみゆるにぞ打擲あそれにほのくさく女人顔
とよくくそれは御人の面ざしに似たるはめめにじや若いはれ
命爰までかそてやらん稚き時別れまいらせしは人は名くに
抑ば人生ゐ又ぬしまとうりありし其くそ家をかぶさるまで

大

まそれは親ハそのまゝ家老にあり侍るの若君まれりまくまよ
しまひのあるかなりやと酒をかう主従みてをとり
あてらし暫ハ言葉もなしやゝあつて若君ハながらも
せよ今の御出でそいかりしかれ共やうに御出立ハあらぶと
みれ乞人小童さへも召具せられず只一人旅をなされ
此内乳をんだし目もあてられぬ御ありさまのいたましさや
いらるれバかくを世に於ちぬれさせ給ひしや梅の猶殿
ふなかりし時すそいかゝらんまでもあいさつとせめん暇
たゞ今まで譜代重恩の家を退き出しハさのみにしお
めひしに二人や三河の若君のうくきよびに成長し申し

に侍りて勤めけるハはや二十年の春秋を経に過しまいらせ
しぞや今ハ浪人の浪せるあまで春もなく寒さのか
人に召りし身よりたる旅しさに笠を持つ旅衣うく袂
の露を今も拂ひて猶も棲ハぬ里を尋しが中りくに
涙を押へ旧里を立出たる物あまくより清水村里
まで環をとこる家老をまりの御山まで尋ねそうぞ嘆きおく
ぐれまいらんとまで申ありくの物語に参りまうち
うるばきさめかくしくハれたなれども浪人やさびかるべう
れまがりく環をぜいを述のことハいうすそまでうらひま
いて手だてかなくれバ見れを染たる思ひてんまそ

然るへきれといふやすく宅へ帰く妻や子まゐらで婦く
免のころくとゐ見えしてまうりふ喜くも今ハ安き心地
して旅のうさ忘れてしハてろくましか忽に角に寄なきぞ
身の上のこゝろにかゝる旅に成りすて侍やくしかうきぞめつらハ
最早旅乃わかれ乃途をさまるとぞ客たハ又指今を
やうやく御足もとをゆくのぞらしゐりまさにせ経ぞひろく
うれ浮者青墓にくぶるまゐ宿ひ環ぞぜのとくそこ
しらへ玉みだし召具して上りゆきて業る紀雑の具へ
ひつぞれハけかじとかたくめされさびをろう為へおぶ事
竟まつてせゐの与れまゐせで安仕せさ留まつて侍らん

当時執柄乃御家すそれ人ハ婦ろさとの事をもむ紀
玉よ便ともなりて菜が世渡りのつよく助とかりだ屋
れバ我身にとりても幸とやべしてゆのごわハ妻
やまがくさ年月のその中にもからんとしもあるなる
ながし御めひをよけしかひありてれそやと懐より二
十両取出して妻へわたしなむるよぞ妻ゆへかぎるとも各
くようこぶかく身は御芳志よあつかるざるまし かく環ハ
根のむねをまづしたくつきそ此世に浮もなかるに
されバ御そろし紀罪をたくらべ身の行衛もいよく
よかるまじきにまをすけられまつりせし嬉しさよ

今はかようにれば浪者一刻もはやうと月の影を忍び出
又逢坂の関守籔をもぐさし渡や志賀れ里を過ぎ
めぐるすべ扨てかねをあさうの家ぞ立出て終にる人
くるうなれしめし今一枚取出してあすにまたらず
受取押しいたゞき家と表を後ぐくとなて表を
をとるにふとまし又今をとつては氣をとすまじせ
しおかさまのもの仲やらんさやまく奥の方へ入
るに者もなくは出るやうんといふ路をすまち
ていなまし所へ忍ひもよらぬ後ろより
きくさつを強く撚つて胸をすてるに

うしろのはなさきまとし辱ぬるとのあるものを
所の目代へ参りなしとて終に縄をとうけてれのちは
思ひよらずや酒にふけぬ人らおそれての狼藉ら
とおもひしが疑ぬる子細のあるぞとて縄をほどき
は扨は盗賊との結縁かくは外の人にたるる不思議
彼すそれのねよしくそれもかすしいぐくまでも参る
食し終明ぶくる上勝ねまでは堂実のはさへはよも
あらじとかも驚を気もなくきつくとをもく此の
ゆく程て目代の館に参りれてば警固の武士春秋
をおくつて目代のまへよ引き出せば所の目代大家の

う人に座しいふよう汝に尋ぬることあり只だ行基が道へ
立蔵銭に久しく仮ざせしこゝろねそもそも梁の
信定とくこゝが物をあさまし商人のさる卿へ引
きのこゝろねあるが色ぬる我いづまより身び入るるえ
らわしも多くの中にうく二十歳給矣ありしたる金
なりかくさんさての為よりそ蒙と蒙にうらたる
示の形他人の眼よりへ人すりぬとも商人の目下なり
えぜんみえ出せるこそあらば祈よりと觧座し之汝ならる
てとあしだをも何ましよろずまに入つまじぞ来坐まか
ぼしと常に表声なげ免て驚る擲へ方良太がほく久

多るとハ縁まで孫ハ盗し金かゝるはやまん度羅を
もらえざりして志をと思ふ志いつの世よりハまとする
だされても解れぬ状して薪をがてるべきとんねさるん
もに惜しまんを定めるまでもやすりにぞ抑そそれ有るな
気ありて金きあるにそのほくくそまのつすだきさまを還
しくせめのて終来まてさもし人の外にぞ抑そろし
らんと掃して縁より残るこゝろねを取出し目代の孫れ
さし盗人の罪をあらためんとなに皆印とおすなる金銀
見ゝ孫罷に定まて空地肉へぞ廻地れなりしくゑるは
もはそなくらく記不の月をさんとゝひさ縁公あ

なきさまの人の親しけれども是ハつゐにさ彼やうな
てる月の影もうへぬ窓の内もろくもきるあんな草
禁れ露押たまゝれよし旧里の方と今ハ夢くぞ青
墓のしるしなかりけるかわしとろしとるやかく思ひめく
らせしなるさるに彼ハ朽はてぬそハやく営桜の
彼岸にいてさらずやと只一筋にそのまゝ名をとゞの
なるよりかれハなかりけるを照るに喜ぶをとあづかりけれ
武士何某が家人に不二へといふ者情厚て朝夕
食事なとあてくれける喜びが容儀たいはいらき
清外くれ旅人よハ似ぬをとこそ或時尋けるハ彼姿と

こまつゝする悪行をつくしとゞたりし此身とも
こゝ夫なき是ハほどなくして忠臣貞女なりしなき
わらを作ハやしかひそかくな旅人となりてかひたる
まやなあるゝしてもさることをさいふゝのひとしまへハ
うしなきれあらんこゝのそとうしぬるそハさきしな
ゑるれバ歌そいて夜のまにとも去くらがやとかれかれ
ハ喜び涙をえるぐしとゑみわらしてかも便りまいりし人
ども旧里へハ某が最期のありさまをときこえ今ハ
ハ弁くに闇へて迷ひハさりぬ今生までそこの遂の次
きよらにみて煩悩獄卒に責ぐるしむとも来

生まれは上不運なるみをむすむすとやうに
一ぼんちんりんのうてなはつゆきえる万徳の月夜
そそておぞたんて我がよふれたびはなし其時こそ
父母まもまいさんたびあちしやまけともせめて
美濃の国あとはかの宿に環としてはさみれ気し
女のんべうが足ぞ菜が世よるきさりのとるりし沈習
まをすきくぬ間はなさけとえてぬくものぞとて
うらみの念ありもあつまくりんくあきらめ
したがとろうしうれをおもりべべくそ黄泉の
旅う出たるよしきくへとべらはらろさん人ま

こゝろしぞんぢすればかよかゝる雲晴て以来給
浮かぬこゝろもおもひしれバうくしえつゝ動きそう
かくとえかく頼りればゆゑ六間て夫それとやすた
病気て以人宮よるまあるは久八むげ不孫ちよりくべ
某亭か環でせふげんざんそくはなされ倍人
まつせんさうてかゞらうもの空まそれは私がまくえ
およるもあつらん体安やはなもしやれれりしたるま
とそろごろまの文紙くとえつさうえま月に不上いす
引出物してそゑしえ身に不絵かけたる衣をうろ
あらく足ハろゝえ見せ人て環に抑くりたゐまるまだ

しと文そへて渡しければ小糸は六三が形見の品やさら
なべてならぬとて其場より東さ夜ちくてんを頼くさる
まりありしぞ妻もは小糸六三があはれさへ心ざし今は
思ひ残すこともなしいやく猿土手をぞくだりければ
いまだうかうと夜思へば中く小舟たてそまうのあはれ
せんかたなさにうちなくして一向せんお寺に念仏して後
世を祈りつ哀なる

想夫恋のこと

小糸六三は夜を日に続ぎて其深の玉吉か宿々
立まじ抑人のかなやに宿りして立よりまじきなれば安
房に心ばせくれしまでと押ぶしさ女もあつかはれ
は空しくなりたらんはちくてんなるかひやなからん
あつさ夜よ寺内をまるんはとぶらんよりはありがたん
めすはせんと思ひ都うら廻りて都をはなれてき奥
深くなりゆくうちれ板屋にすまふはは夜毎に音さへなる
かの女房琴に好けるよし兼て聞きければ岩の嵐の松
風にたづぬる人の琴の音に押ぶしはかなく楽へ行に
ぞしてさくれは夫を想ひてよとよむ想夫恋といふ
がくなりと叔母て環とあきられたれつむじてりん糸しう
へうだとき案しけるがら玉まる衣れ小紋のきさむら段

出るぬとハよもあらじと思案をめぐらしかの衣を
着し物かんざしハ秋萩なれ今ハ薄とされたる頭梳
の中ぐらの夕暮に筆墨がそへ飛石だくひに立出そ
あそこであるく籠にそうの気さしれ内のさうの
ぞけバ志賀まで聞しハ粉ろく桃源露にやくろび紅
粉眼にまがふ花の柳髪風にこぼるよそほひ文人
はるかなるも抑りけん其うの鸚鵡とてちすまハ翠お
つく籠に入るとも毛色つとら月くしよくものへ
そへ人にくらしめられされバますますきららかなる衣を
くえて日比ふよろしぬに年十六の猶も抑そろしきかのい

てきたるそれはさましかれ環ハ武家へとつとまりし
より寄辺なの物陽片時もすまされやらぬ秋の青簾
待まぎれ哀しきさまに琴かきならしきのふとけ
ぎりかまえ又々くれかゝるかぬれども世の紙秋風の吹きすさ
でハなくよそ音のみこそもるか色に萩の下紫のかや
かゝるしきされたる庭面に立る人ハそれともねざし庭
きみの様は衣をぐろうすまされてくだきさかも空に
緑色ハ年十六今ハよしと環がまへてそやしまの環よ
ぜふくまとせめよや此衣をおろしめして抑すみや茶
しそれ途中にやまでまつてそ人と聞に環ハこえ叢の秋の

由なき人あしくハさなくてありうるん娯もをしべ爰よるべしでおれこ
らハらなをすてさむろうりのるれしふ千萬さをれ
まんしせんや差出をつうむしらふ出あるらんのひふ
むりしなれハ今ハ一刻もいそやく冥し出だしと
そぞ旅めきく出さく入るふ千本の松本すてて
いく着たるぐ思ひ上りゆひし都横野の茶店良太と
やうんもむるまりし浅うして今ハ志賀の里ふ川ろの
縁をおもてものだせゆひ只明暮わざぜ乃仏事のとお
おせどもく人魚さ金の方おもぞんきみふえつく茶斎
ままめてそとうまへせ志賀ハ仏供をたしとそろく

たのまきゆるへせまれけもハ参りてハ欸よきもさ秋ぞの
るく出させゆ人法供やたしときくよう気詠をなう
くて君かへえぞたきすふ旅ハ淋んなくまが母て須ハ
らまとも楽だく人ふむもて姿露ときる人たきえん成すも
も気楽しと紙定めてありハ四方れ夜琴の音の
聞人たるんハ其外面ふ待ゆさぐし思ひハぞすかつるんと思ぐ
約束を定めて人ふさらしまてハ一大事と不ふ大ハりと
居しかく文をの夜どのに入て臥ふりかくて其夜も明
ぬれハ人ぐふさうれどしと急ぐ旅のよしなてまらんず
そうた小笠を手ふ持今よりも十余里さうあしへ作や好でハ

叶はぬことありとてかの人にはゞやきはくよみて
参りけんかんとさもいそがはしく立出しが青野が原にと云
心の松原にかゝりて日はくれかゝる紙ちりたる秋の日のうち
ひとくれや雲乃はてまも入くれバそろくとちの松
に衣手振る秋のはまて墓にいでたるその家近き辺に
たぐひなき齢にそびえて待りけるが漸に紙も更里人ほど
づゝりてある鳴く虫の音も環がたくべうとばこるに識
れ音をきくえりるまを使にたどるよりてかれべり心中ら
婦人のむかし我おりひ出てやまた一曲とそのすめ七尺の屏
風まてゐるくそもかなしはけるぞ残ざりし一條の移らく

はなよくとも云うべからたべざらんと弾りけるに小ネ
出力を浮墳根ちらくさしくまぬめとよう環は古るら
きこゆる女房ながら今をすぐれし虫の音のまへ
ゑあるは母くそくと遠くべしして小ネ山へがきたりしと
庭へ立いてそゝかしく旋根へ天月とよろぢのぶをべに
ネ山はそもようさもそうずいときさかゝらし夜に
まぎれゆくさまの秋ゆく断崖秋の日は志りの弓張之
ゑんかう空城にましてぬ抱そげなる追ふのかゝ
らんともかぶにかくしとそるる月さへ志らぬ山乃に
分入まれりのこおやわらへねどもも耳みゆるりのとて

はさ月さ月のきさらくれハ尾上の小鹿よ松風の音の
ミきこえくく抽遠きさといまんそさなしかりく吹行ま
海よあがむれハ岩の泉むせんくぬの縦引状の猿さ
けんで枝よおそ娘ひりさみ中く小むだ玉のくさぬれバ
それまハ身でハきるあまけ灸人をもん今先へとてハなそむ
へうもあ月しいかいすしそもハ及うんあらう
ろくろものもはらざ色ハ足より出る血をまさとそあ
人経に入たる源山辺よ向ひてむかる涙ハ袖をぬらし晴
嵐もそぞへをとかりし様く縁のまあぞすしれの糸がなせやう
せう神もろ人たまとバりせん本ん里も幸されバとて松根

小腰なかりれんばしやもとらひかり小ネ六ぞ荊と
いへるの本足足縦いて灸血治の出る縦入てそ擬
はかう方の玄牟三ざうの有うぞとしら願とめん
をあのられしるまけんも足みいろくまるべき夫へ
法をめめんしく灸こぶろハ然しきへのまるとその
ことかれバいるあの難役をもせ灸流留りかりと出しそ
中つくの痛ハしさよ是とやしを過去のいん縁とおかへ
らく法名の木乳母しうえ嫉しうハぞくよ小ネ六ハよ
精具ハ流言薬ハあがとりそれ某さつそこぬ気をあこが
逢てハ猶もそよ仏の増りくとこうつり仏のあゆかしべたとへ

穴の中みの底へ入るとてもいとはぬとまでなそのゆへ
ハ是に汝のはあ必はかくまいつゝすべかりしと鳥窟窮て
懐に入るといふ種でもそ是まで汝倭佼て其と春ゆるが故
そとりおて渡まと捌へとるそうざつとにてありけるよりと
大月光とおけくころにがくとてもあるかは巻紙備より
穴を閉ちせんと契し小袖のむつどもとうくのあまと
消なん命も夕アあしたとありてれはあるをのかるかず
滅もと命る者ハ定く離れるといへとし然ば着よりあかき
血たるとみてれハ定まるとゝはまさら炙ほくいふる
らん人まもえりしこ人ゆへ情をうくだき入まるりとろあく

はべきなりし志賀すての都わがくし空かれくれの
跡ハ後にかきくれてそこをとへども袮ぐるたぐひもなく
あきらき冬に逢ねとの情うん百年代ものちかげへ
なるつく紀朝の時ハ始一仏土へむかへまつりせんかどうへ
に目もくれなも消はそく涙もさくれしと母しんずなも
そこまで鉄入らんとせし汝に不山のさぬぐふらてまうく
すけるがきのよふも今ハ思ひるたるまでいふなくんへ
もこえよしと汝と又まいきこえハ今より菜見をみへまつてせ
いづくれ浦にも忍やもとう捌ちはきぬて二ぶて汝月を
まともにかげめんとんさだまつするある妻もあられへ室

きぬはぢかしきもかくゆゑそうる下級のはるみがらの縁
うしゆたびなしぬ身そをもうまるまのひニ人が中に子をがりよ
けくく手すまゝがなくたのしきまゝかあくびやは姿すを
春常に物く届そもなぐくへあ月のなおまするふぞる猫ひ
其上義店で久よあく手る姿も又べきへ安すくして
世をとまさらん今のまが足に引くへて目出度ゆかるらん世
まるへとそろくとかくまよる塚へなれのうへ入るくたく
さるかぐるきいりかが今へ余ゆよれ人へ同じ世界の露
とも言へ一底のうち川とるもかしんとへまし人ききて
ばとるもせ又くへさ夜をも久すと形るだまさまへ行さん

人にもさへよかれどなのとのまう死しぞまよ前世の契
ありしとがへ人そあまれとの人まもまする人とれしもな
さけとくだまさんへ又さ夜をまへ久の後嫁とるもう
いくい此世をあのびもとよれとも昔の人のこゝ思しく
て思ひれぐすへまゝるそもなくさむしこへまもあに其上
小千上へか今のしかれむ本葉の夜りくまぬえるぢか夜まう
うるてき目にえんよりへ是なる谷そ又篤て死ぬや
と押りへども春なれ空くなりのひし同じ野でうそ
死されの所をとゞてへ死さうずしやせん角やとまず
へとうまをはく又も縁入云鬼極る物とう人声でききさらん

けふをばくれんよく吟ずれば一日夜の歌作りし名の志
き眼玉のいでたる鼻ならきく三十計の男なり其悪の
かれた髭月がをくみだれたる女に擬るにたげとして数へ
たゞら折りもて手まりしとれば二所も傷ざれどさしつまり
まそいまの川の小松へ付たるてしたうつるせ耳より
ふすまくれば小ふ不尓あまてうつして袖りも追ぐめぐり
まかるよと現なた環をもすがめくよくみめあハして此ぞ
そのがきんと細りよ爾よ仙人の身まぎでるこの細た
ちうまとめでよかれてなかりう紙をうのろく落
行けら瀬にこもんとて衣や帯を弓ぶの落たるみ

もそ己へめでのゝく迹行けるかくて追手の大勢は
爾をさして懐ひ来りしが此に二筋ありける紙こぎの処
へ行りんたのゝく落まるや志よせん二たへ手分して
神かけんとせんぎしけるがけうみの落たるふ紙入
たけそおもこゝすへ余りよいそいく衣とも帯とも
落たるやとさまあげてさうふへん馴し環る衣りれバ
さればそろよのゝさへ落けるみまぎれなしいそげや
そうと又彼ふ路へ同ふ神へ行しが瀬ふ行澪を分だと
しそ追手の者へ青暮へむかしう神りぬるそ理られ

奇談環草帋第二